

現代短歌の中の地球科学

～プロローグ～

中世和歌の世界には、地球科学に関することと言えば富士山の噴煙くらいしか表れてこないかも知れませんが、現代短歌の世界では実に多くの素材が扱われていることをご存じでしょうか。地球科学の用語が短歌の中でどのように扱われているかに、ちょっと目を止めていただけたらうれしいです。

短歌は新聞歌壇などを見てもわかるように、世の中の出来事や世相を切り取ったものが多くあります。地球科学関連の素材で言えば、地震や火山噴火などがそれに当たると思います。俳句は17文字のなかに季語を入れますので(最近では流派によっては入れないところもあるらしい)、季節感が表れる天文や気象現象は多く採りあげられますが、なかなか固体地球科学用語は採りあげてもらえないようです。それに対して、短歌は31文字(原則)で表現される詩型なので、専門用語を入れる余地があります。ただ、専門用語を入れる場合、言葉として面白いもの、ある程度知られたもの、あるいはそのものは知られてなくてもイメージをわかせるような言葉を選ぶ方が無難だといわれています。そのような目で見ると、広く受け入れられている地球科学の言葉って何だろう、という興味がわいてきました。

このコラムでは筆者が目にした範囲で、地球科学用語が織り込まれている現代短歌を何回かに分けてご紹介しようと思います。たぶん、作者や出典が偏ると思いますがご容赦下さい。また、数例をのぞき、基本的に歌集として本にまとめられたものから引用しています。探してみたら、地球科学用語のイメージを自在に膨らませて比喻として用いられているものや、名所を訪ねた折りに石や地層に着目した短歌もありました。ただし、単に「石」や「岩」とした短歌は取り上げていません。私は歌人ではありませんし、狭い意味で地質や岩石の専門家でもありません。しかしシロウトだから気づくこと、シロウトだから許容できる部分もあると思いました。ここでは学術的ではなく、愉しみとして地球科学と現代短歌の豊かな触れ合いを探ってみたいと思っています。

地球科学用語については先ず「広辞苑」をあたりました。普通の歌人ならば用語の拠り所を国語辞典に求めると考えたからです。その上での知識はおもに「地学事典」(地学団体研究会編, 平凡社)と「石の俗称辞典」(加藤碩一・遠藤祐二著, 愛智出版)に拠りました。

初回は、機会詩の代表として地震の歌をご紹介します。日本は地震の多い国ですから、わりと日常のこととして地震が歌われています。ただ、大災害を引き起こす地震はまた扱いが別です。最近の例では、阪神大震災のときにも数多くの短歌が作られました。しかし阪神大震災ではあまりにも生々しいので、ここでは、現代、というよりも近代の短歌ですが、関東大震災で被災した北原白秋、三ヶ島葎子の短歌をご紹介します。

地は震へ轟き享る生けらくやたちまち空し
うちひしがれぬ 北原白秋「風隠集」

秋はいま百舌鳥の鋭声のかなしきに今日も幾度
地震ふりにけり 三ヶ島葎子

地震は「なる」または「なるふる」と呼ばれています。もともと「なる」は大地を意味する語で、大地が震えるので「なるふる」だったそうですが、いつよりか「地震」＝「なる」という用法になったそうです。そのため、短歌では「地震ふる(なるふる)」という使われ方をしています。

関東大震災はよく知られているように1923年9月1日に起きました。地学事典(平凡社)によるとマグニチュード7.9、断層面積130×70km²、ずれの量は平均2m程度、と書かれています。北原白秋は小田原、三ヶ島葎子は埼玉で被災しました。北原白秋の家は半壊し、三ヶ島葎子は余震に怯えつつ3日間露宿したそうです。

作者紹介

北原白秋：明治18年福岡県生まれ、昭和17年没。

三ヶ島葎子：明治19年埼玉県生まれ、昭和2年没。

森尻 理恵(産総研 地球科学情報研究部門地球物理情報グループ)